

本会元理事長 朝尾直弘先生を偲ぶ

本会元理事長の朝尾直弘先生は、二〇二二年七月七日、享年九〇歳で逝去された。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は一九三一（昭和八）年二月十七日、大阪府吹田市に生まれられ、五〇年三月兵庫県立芦屋高校を卒業、同年京都大学文学部に入學。五四年同史学科（国史学専攻）を卒業、大学院文学研究科に進まれた。小葉田淳教授のもとで日本史学を学び、五九年博士課程単位取得、六〇年京都大学研修員となり、六三年堺市史統編編集主任（非常勤）を委嘱され、六四年九月に京都大学文学博士の学位を授与されている。

一九六八年四月、京都大学文学部助教授に就任され、八〇年一



二月教授に昇任、九五年三月停年退職され、同四月京都大学名誉教授の称号を授与された。その間、多くの学生・院生の教育・研究指導にあたらただけでなく、文学部博物館の改築に尽力され（八六年竣工、八七年開館）、初代館長（八七年から二期四年）、文学部長（九〇年から二年）をつとめられた。また、大学全体の行政についても、学生部長（八五年から一年）、大学評議員（八七年から九五年まで）、附属図書館長（九二年から三年）などを歴任されている。

本会史学研究会についても、評議員・理事を長くつとめられ、一九九二年から二年間、理事長をつとめ、本会の発展に尽くされた。

京都大学退職後は、京都橘女子大学教授・同客員教授として一九九五年から二〇〇四年三月までつとめられ、その間、文学部長、大学院文学研究科長などを歴任されている。また、住友史料館館長（一九九九～二〇一七年）、彦根城博物館館長（一九九四～二〇〇四年）をつとめられた。

先生の御専門は日本近世史であるが、「（私は）教科書墨塗り世代に属し、その衝撃が日本史研究者の道を選択させる結果となった」と初心を語られ、当時はまだ各所に残されていた近世村落の「膨大な量の古文書・古記録の類を発掘し調査する仕事は……未踏の原野を開拓するに似た意欲と興奮をもたらした」と回顧されている。その成果が学位論文「寛永時代の基礎的研究」であり、『幕藩体制社会の基礎構造』（御茶の水書房、一九六七年）となった。

しかし、先生の研究の魅力はそうした史料実証の開拓性と厳密性にあるだけではない。学会での論争（太閤検地論争・軍役論争など）を通じての研究史や理論の明快な論点整理と斬新な問題提起、教科書裁判などさまざまな現実社会の課題と向き合いつつ、史料実証と格闘することの方法論的意味の追求。先生はそうした「理論風の文章」は歴史叙述のための「鶏ガラスープのガラ」だと謙遜されたが、私のような戦後歴史学の周回遅れの世代には、そこにこそ「歴史研究のダイナミズムの回復をめざ」す、はかり知れない魅力の源泉がある。論争の軌跡と「鶏ガラ」は「日本近世史の自立」（校倉書房、一九八八年）にまとめられているが、美しい論争のなくなった、論点を剔抉して論争を作れない、今の日本史学にとって、若い世代にもふり返ってほしい財産である。

農村史研究に続いて一九七〇・八〇年代には、幕藩権力の特質を「將軍権力」としてとらえ、その形成・確立過程を百姓の運動との連関で、また天下人の政權構想を通して分析した権力論。室町幕府以来の展開を東アジア世界における通交貿易体制や「日本型華夷意識」として分析した鎖国論。幕藩権力から社会諸階層に至る公権の重層性・身分集団間の「平和契約」を論じた「身分制社会」論などの論稿を次々に発表され、学界をリードされていく。先生は御自分の研究について、「総体の具体的把握、日本近世という空間的・時間的に限られた場を総体として把握し、諸階層の生成・展開の運動方向をとらえ、それを具体的に叙述すること、これは専門の歴史研究者としての私が自己に課した課題」であるといわれているが、京都大学退職の前年九四年にまとめられたこの『將軍権力の創出』（岩波書店、角川源義賞受賞）は、その結

実であるといえよう。

その他、一般書の形をとってはいるが『日本の歴史17 鎖国』（七五年）・『大系日本の歴史8 天下一統』（八八年）・『都市と近世社会を考える』（九五年）などにも鋭い問題提起が鏤められている。そして二〇〇三・四年に、集大成として『朝尾直弘著作集』全八巻（岩波書店）が刊行された。

ところで、先生の御研究は、一九七七年ハワイでの日米会議にはじまり、八一二年のハーバード大学日本研究所の招聘、八三年国際アジア北アフリカ人文科学会議・八四年日仏シンポジウム・九〇年マドリッド国際歴史学会議などでの諸報告として、国際比較に耐えうる日本史学の水準として高い評価を受けられている。

さらに、『京都町触集成』一五巻・別巻二（岩波書店）の刊行、彦根藩井伊家文書三万点の調査と目録編纂、『京都雑色記録』全三巻（京都大学史料叢書）、『西洞院』時慶記などの翻刻刊行をはじめ、『堺市史続編』『岡山県史』『八日市市史』『彦根市史』などの自治体史刊行にも大きな貢献をされている。また、『岩波講座日本歴史』『日本の社会史』『岩波講座日本通史』などの企画編集にもあたられ、九四年には『日本の近世』全一八巻（中央公論社）の編集に対して毎日出版文化賞特別賞が贈られた。

学会でも、日本史研究会研究委員長（一九六八―七一年）、歴史科学協議会代表委員（七三―七五年）として中心的役割を担われ、日本古文書学会・東方学会・史学会・日本歴史学会の評議員等をつとめられたほか、国立歴史民俗学博物館・京都国立博物館・冷泉家時雨亭文庫および文化庁の文化財保護審議会専門委員

など文化財保存・文化行政にも貢献され、一九九九年紫綬褒章をうけられ、二〇一二年文化功労者に選定された。

一周忌の二三年七月八日、文学部第三講義室で偲ぶ会が開かれ、学恩をうけた多くの研究者や関係者が集った。先生は『著作集』の自序で、「(私は)いつも日本近世社会をとらえるなら、どこから攻めればよいかを思案し続けてきた。問題はここだ。皆で考えよう。編集の仕事が多かったせいもあり、仕事に対する基本姿勢はそのようであった」と回顧されている。編集企画のみならず、ゼミや古文書合宿、研究会や学会での報告や討論、そして先生が書かれた論文・著書などでも、いつも「問題はここだ。皆で考えよう。」と語りかけられていた温顔が臉に浮かぶ。

今は心から御冥福をお祈りするのみである。

(横田冬彦 記)